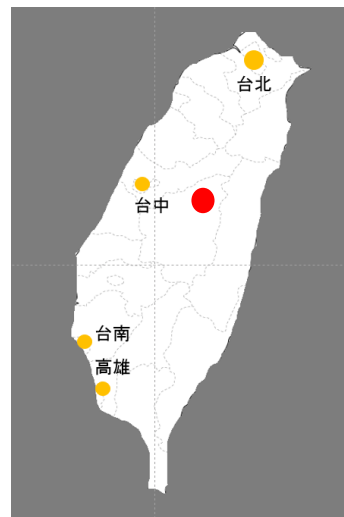


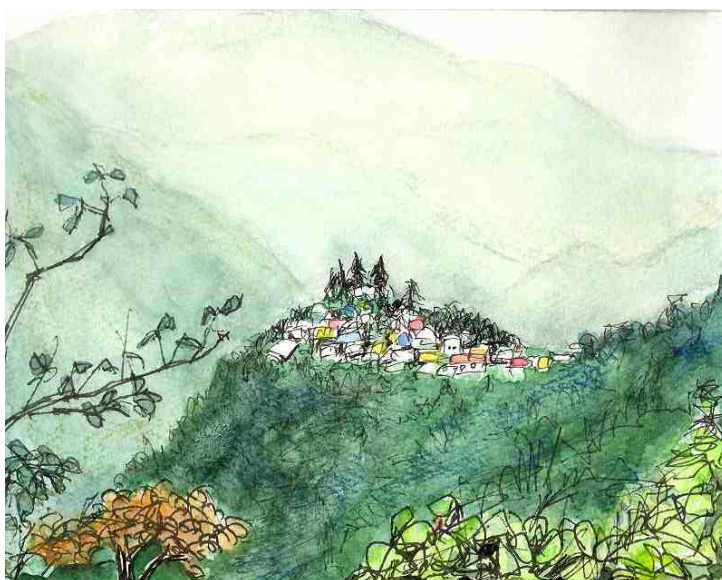
タイヤル族発祥村「天空の城」・瑞岩部落 —921 震災後 12 年、ついに村落移転実現！

くらし学際研究所・チーム〈近隣アジアを知る〉

垂水英司



埔里を出発してから狭い山道を登り加減に車を走らせてきた。もう1時間以上になる。道の左側をのぞき込むと深い谷だ。しかも、ところどころ道路の路肩が崩落している。運転しているのは、新故郷文教基金会の顔新珠さんだ。彼女の運転技量は確かだし、もちろん私も信頼している。それでも、「落ちたら台湾に骨を埋めますよ」といったジョークを何度か交わしながらのドライブだった。



「天空の城」と呼ばれる瑞岩部落。タイヤルの祖先はこの村にあった大きな聖石の裂け目から誕生したという伝説がある。

その日（2005年）私たちは、921地震の被災地の一つ、タイヤル族発祥地の伝説がある瑞岩部落へ向かってい

た。震災被害は場所によって様々だが、土砂崩れや地盤崩壊などによって、住宅の集団移転や村落移転を余儀なくされた地域もあった。（台湾ではこれらを「遷村」と呼んでいる）遷村は、特に山岳部にある原住民族の集落に集中した。この瑞岩部落もそうした遷村の一つで、移転規模が最大、しかも全村移転という事例だ。震災後5年が過ぎ、他の遷村集落は紆余曲折を経ながらも既に着工あるいは完成したのだが、この瑞岩部落はまだ着工に至っていない。一度現地を見て確かめてみよう、というのがこの時の瑞岩行の趣旨であった。

車は、前方に突き出た山裾に沿い右にカーブを切って走っていくと、突然左前方の丘の上に小さな集落が現れた。「あれが瑞岩です！」と顔新珠さん。周りを薄もやのかかる山々で守られるように、小さな丘が鎮座している。その頂上に100戸ほどの民家が今にもこぼれんばかりに蝟集している。「ちょっと、車を止めて！」と私は言った。なるほど、人々が「天空の城」と称するのももっともだ。暫し天空の城に見とれた後、集落へと向かった。

921 地震が起こった時、瑞岩部落では 8 戸が全壊、15 戸が半壊したものの、さほど大きな被害ではなかった。ただ、私たちが通ってきた連絡道路が不通になり、長期にわたって孤立状態が続いた。さらにその後の政府の調査によって、集落がある土地に斜面崩落や地盤傾斜が見られ、地層滑動の可能性があるため、「継続居住不適合」と判定され、村落移転計画が提起された。

最初、村人たちはいぶかった。ほとんどの住宅は支障なく住めるではないか、本当に移転は必要なのか、しかも、山頂は土地が狭く、移転場所は丘を降りて河沿いの平地で探す必要があるとのことだ。賛否が分かれた。しかし、将来のことを考えればと、村人たちの意向は次第に移転同意に集約されていった。そして、移転地も 1 キロ離れた河沿いの平地と決まった。



村内は家屋が密集している。建物の被害はさほど大きくなかったが、地盤が危険と判定され、村落ごと移転することが決まった。

しかし、この合意は問題の始まりだった。実際の着工に辿りつくには多くの困難が待ち構えていた。移転団地の土地確保の問題、移転する住民の自己負担をどうするか。また、その後毎年のように来る台風や水害で道路が寸断され何度も工事ができなくなった。さらに、鉄筋の国際価格の高騰に対し施工会社が訴訟を起こすなど、次から次へと問題が発生した。

私たちが訪れた時、先行して建設された新しい小学校は開校していたが、住宅着工の見通しは立っていなかった。結局 107 戸の新住宅が移転地に完成したのは、震災発生後 12 年が経過した 2011 年の年末であった。

遷村問題が、いっそう大規模で複雑な課題として台湾社会に突き付けられたのは、921 震災 10 年後の 2009 年 8 月 8 日台湾南部で発生した大水害・八八水災（台風の名を取って莫拉克風災などともいう）である。台湾南部の山岳部にある多くの原住民集落が大きな被害を受けた。移転再建か、現地再建かをめぐって激しい論議が展開されることになる。それは単に居住地の安全あるいは住宅確保ということだけでなく、原住民族の生業、文化、歴史、将来像に関わる問題を深く内蔵していたのである。

2011 年 3 月 11 日、日本の東北で津波災害が起こった。直後から高台移転が最大の論議になった。その時すぐに私の脳裏をよぎったのは、台湾の遷村をめぐる一連の見聞や論議だった。思い起こせば、私の見聞の出発点がこの瑞岩部落だったのだ。

タイヤル族（泰雅族）

台湾原住民族として認定されている 16 族のうちの一族。人口は約 9 万人で、阿美族や排湾族などと並んで人口が多い。居住地は台湾中北部の山岳部に広く分布している。